

故事成語成句辭典

遠藤哲夫

故事成語成句辭典

遠藤哲夫 著

明治書院

著者略歴

遠藤哲夫〈えんどう・てつお〉

大正15年 東京都に生まれる。

昭和27年東大中国哲学科卒業。

現在岩手大教育学部教授。

専攻は中国古代思想および漢文教育。

主 著

『莊子』（明治書院「新釈漢文大系」）・『小学』

（明德出版「中国古典新書」）『〈傍訳漢文〉文』（明治書院）他

故事成語成句辞典
1800円

昭和48年11月25日初版発行

昭和54年9月20日4版発行

著 者 遠藤哲夫

発行者 明治書院 代表 三樹 彰

印刷者 大日本法令印刷 代表 田中 忠

発 行 所 株式 明 治 書 院
会 社

〈101〉東京都千代田区神田錦町1-16 TEL 292-3741(代)

振替東京 3-4991

©遠藤哲夫 1973 0581-10130-8305

はしがき

隣邦中国の古典を母体とする故事成語・成句、また名言のたぐいは、その文物の移入と共に早くからわが国の人々に親しまれ、深い共鳴にささえられて、しかも漢語独特の文辞をふまえながら今日になお力強く息づいています。

それらは、単に修辭や言論のあやとして国語表現を豊かにし、言語生活に味わいを添えるという役割りを果たすことにとどまりません。既にそれは日本語の血肉と化して思考の基底に融合し、あるものは伝統的な教訓、処世の知恵として長く人々の心情をつちかっています。そして人々は、そこに心理の機微や論理の機知を見だし、人間の魂の郷愁を探り、あるいは情愛や道徳への回帰にいざなわれ、既成の概念を跳躍する非情の直観に感動するのです。それはとりもおさず、それらの短語句が限らない人間の経験と思惟の練磨され続けてきた結晶であり、誠実を尽くして人生と社会の赤裸々な可能性を追求した生々しい道程そのものを示すからにはかなりません。

知に働き情に棹さす旅人が、いにしえを顧ることもなく、ひたすら物質の利と官能の貪欲に酔いしれるとき、人の世の空しさは流れに浮かぶうたかたにも及ばないでしょう。古人の残した知情の凝縮ともいえるこれらのことばは、さわやかで揺ぎない人間の原点を今日の人々に提示し、現実の悲喜劇を越えてはるかに安らぎと謙虚な反省の道を望み見ることを教えてくれるに違いありません。

ささやかなこの書物が、古き世の人を友とする手引きの一燈ともなることができますなら、これに越した喜びはありません。

なお、故事成語やことわざなどに関しては、従来幾多の解説・研究書が刊行されています。本書はもとよりそうした先人の業績の驥尾に附して成ったものです。やや特殊と思われる語句や、わが国特有のことわざに類するものはこれを割愛しましたが、いずれ後日にはこれらを含めた集成を期したく思います。不備なところにつきましては、御指摘・御叱正をいただければ幸いに存じます。

本書の刊行に当たりましては、明治書院の三樹彰氏をはじめとして、小林美枝子・宮坂裕子両嬢と編集部の方々の励ましと協力を得たことをしるし、厚く感謝の意を表します。

昭和四十八年十一月

著 者

凡 例

一、本書は中国古典に基づくいわゆる故事成語を中心に、広く人々に親しまれてきた成句・名言のたぐいを選び、その一般的な意味を解説するとともに、古人の物の考え方や感じ方が理解できるようにその原義を明らかにすることに配慮した。

二、本文は一般読者の便を考慮し、すべて新かなづかいに統一し、当用漢字は新字体を用い、「見出し語」・「出典」・「参考」にはすべてルビを付した。

三、熟語以外の「見出し語」は書き下し文で示し、五十音訓に配列した。「見出し語」が原典の語句に即して訓読されている場合は、ハ ヴ中に返り点を添えて原文の形を示した。

四、「意味」の項では、一般的に用いられている意味と派生義、また独特な用法についてしるし、意味内容が二つ以上に分かれるものは①・②・③の記号によって区別し、「出典」の項と対応させた。

五、「解説」の項では、各語句の字義や、その成立事情を述べ、原義が容易に理解できるように配慮した。

六、「出典」の項では、「見出し語」を含む原文、または「見出し語」の母体となった原文を文語の書き下し文で示し、適宜(Ⅱ)を用いて口語訳を付記し、末尾に「」で書名・編名、または作者と作品名を明らかにした。「…」の記号は文中での省略を示す。

一、「参考」の項で用いた記号は次のものである。

Ⅱ 「見出し語」と同文・同義の語句。または同一出典内に含まれた類義の語句。

⋈ 「見出し語」と類似する意味・内容を持つ語句。

◇ 「見出し語」と対立する意味・内容の語句。

○ 「見出し語」と関連するか、またはそれから派生・独立した語句。

↓ 参照すべき「見出し語」を示す。

なお、「参考」に掲げた語句は特別なものを除き出典の編名を省略した。



哀哀たる父母、我を生みて劬勞せり

△哀哀父母、生ゝ我劬

勞▽ 意味いたましいことに、父母は私を生み育てて苦勞を重ねられたことである。解説「哀哀」は、いたみ悲しむさま。「劬勞」は、苦勞に同じ。父母は私を生み育てて苦勞なされたが、今はもうこの世になく、まことに悲しさに堪えられないことであるという意で、両親が在世中に十分に孝行できなかったことをなげいたもの。「哀哀たる父母、我を生みて勞瘁（＝つかれやつれる）せり」とともに、親に対する孝心をうたった句である。出典「蓼蓼たる我（＝高く生い茂ったツノヨモギ）、我に匪ず伊れ蒿（＝戦地にあつて父母と死別した私には、それはツノヨモギではなくクサヨモギかと識別に苦しむほど心は混乱している）。哀哀たる父母、我を生みて劬勞せり。」（詩経 小雅谷風 蓼蓼）

愛多き者は則ち法立たず

△愛多者則法不レ立▽

意味情愛が度を越せば、

法令は施行できなくなる。法律の執行には、情愛は制限されなければならない。解説為政者の慈愛が度を越えれば、人民はそれに甘えるため、法律は施行できなくなる。また、為政者の威厳が少なければ、下の者が上の者をあなどって権限をおかすようになる。したがって為政者は慈愛の心を制限し、威厳を十分に備え、刑罰が厳正に行われるようであれば、法令は施行できないのであるという。法治主義の立場にたつことばである。出典「愛多き者は則ち法立たず、威寡き者は則ち下上を侵す。是を以て刑罰必せずんば、則ち禁令行われず。」（韓非子 内儲説上）

愛多ければ憎しみに至る

意味度を越えた愛情を受けければ、その反面で他から

憎しみをかう。解説恩愛を受けることが甚だしければ、一方では他人がそれをねたみ、人から恨みや憎しみを受けることになる。上の人からの愛情だけに甘えていると、身の破滅を招くことがあるから、十分に注意しなければならぬといういましめ。出典「恩甚だしければ則ち怨み生じ、愛多ければ則ち憎しみ生ず。」（亢倉子）参考「愛は憎しみの始め、徳（＝恩徳）は怨みの本なり。」（管子 相言） 恩甚だしくして怨み生ず。

愛、屋鳥に及ぶ

△愛及屋鳥＝V意味その人を愛すれば、その人の住む家の屋根に

る鳥までが愛らしく思われる。憎愛の気持ちは、その関連するものにまでゆきわたること。【解説】カラスは一般に

人にきらわれる鳥であるが、自分の愛する人の家の屋根にいるカラスは愛らしく感じられる。また逆に、その人を憎らしく思っていると、その人の家の召使までが憎らしくなる。人間の憎愛の念は、その実質を別として、関係する事物にまでおし及んでいくことをいう。【出典】「周公曰く、其の人を愛する者は、其の屋上の鳥を愛し、其の人を憎む者は、其の儲者（＝召使）を憎む。」〔尚書大伝 武成〕【参考】屋鳥の愛

愛日

【意味】①冬の日。冬の日光。②日のたつのを惜しむ。時を大事にする。③親孝行な息子。【解説】①

冬の日ざしはおだやかであるところからいう。夏の日はこのに対して畏日という。②「愛」は惜の意。日の早くたつのを惜しんでつとめはげむことをいう。③親の在世中の日時を惜しんで孝養を尽くすことから、孝子のことをいう。【出典】①「冬日は愛すべく、夏日は畏るべし。」

〔左伝 文公七・杜預注〕②「君子は日を受しみ以て学ぶ。」〔大戴礼 曾子立事〕③「孝子は日を受しむ。」〔揚

子法言 孝至〕【参考】孝子日を愛しむ。

愛して其の悪を知り、憎みて其の善を知る

△愛而知其惡、憎而知其善＝V【意味】愛しても、一方で

はその人の短所を見分け、憎んでも、またその人の長所を認める。愛憎の感情に流されず、人の善惡・長短を理性的に認めるようにしなければならないということ。【解説】感情と理性との間に明確なけじめをつけ、特に盲目的な愛憎に溺れて人の善惡を見失うことがないようにと戒めたことばである。【出典】「愛して而も其の惡を知り、憎みて而も其の善を知る。」〔礼記 曲礼上〕

愛する所には驚馬を相するを教う

△教所愛者相驚馬＝V

【意味】高級で特殊な技能を身につけるよりは、一般的な技能を身につける方が利益が多い。【解説】「驚馬」は、駄馬、世間のなみの馬。「相」は、外観から鑑定すること。昔、馬の鑑定の名人といわれた伯楽は、自分の気に入らない者に対しては一日に千里も走るといふ駿馬の鑑定法を教え、自分の気に入った者に対しては駄馬の鑑定法を教えたという故事にもとづく。千里の名馬はごくまれにしかないから、鑑定の機会もほとんどなく、それによる利

3 あえて～あおは

益もとほしいが、駄馬は毎日のように売買されるため、鑑定による利益はたいそう多いからである。【出典】「伯樂は其の憎む所の者に千里の馬を相するを教え、其の愛する所の者に駕馬を相するを教う。千里の馬は時に一あるのみにして、其の利緩し。駕馬は日に售れて、其の利急なればなり。」〔韓非子 説林下〕

敢て後れたるに非ず、馬進まざればなり

△非ニ
敢後

也、馬不進也▽【意味】自分の功名を誇らずに卑下すること。後には誤って、自分の過失を他人の責任になすりつける意に用いる。【解説】「後れる」は、味方が敗れて退却するとき、最後尾となって敵を防ぎながら味方を助けることで、大きな功績とされる。魯の国の大夫であった孟之反は、味方の軍が敗れて退却するとき、自軍を援護するため最後尾についたが、やがて味方の陣營の門に達すると、自分の功を卑下して馬をむち打ちながら「自分から進んで最後尾（しんがり）をつとめたのではない。馬が進まなかったのだ」と言ったという。【出典】「子曰く、孟之反は伐らざる。奔りて殿（しんがり）たり。將に門に入らんとして、其の馬に策うちて曰わく、敢て後れたるに非ず、馬進まざればなり、と。」〔論語 雍也〕

仰いで天に愧じず

△仰不_レ愧_ニ於_一天▽【意味】万物を照覧する天を仰いで、自分の

身に少しも恥じる点がない。自身になんのやましいことがなく、公明正大であること。【解説】孟子が述べた「君子の三楽」の一つ。三楽とは、父母がそろって健在で兄弟が無事であること、天にも人にも恥じないこと、天下の英才を得て教育することである。この句はその二番目の一節。【出典】「仰いで天に愧じず、俯して人に作じざるは、二の楽なり。」〔孟子 尽心上〕【参考】「俯仰天地に愧じず、

青は藍より出でて藍よりも青し

△青出_ニ於_一藍_ニ而青_ニ於_一藍▽

【意味】青色の染料は藍草から作られるが、その色彩は原料の藍草よりもさらに青い。学問修養はそれを積み重ねることによって、より高次なものへと発展することができるといふこと。また、弟子が先生よりもさらにすぐれるたとえに用いる。【解説】荀子が学問の重要性を説くために用いた比喻で、「氷は水之を為りて水よりも寒たし」と対句になっている。「藍より出でて」は現行本では「之を藍より取りて」となっているが、要するに藍草を原料としてそれから作りだすこと。【出典】「学は以て已むべからず（＝学問は途中で止めるべきものではない）。青は之

を藍より取りて藍よりも青く、氷は水之を為りて水よりも寒たし。」〔荀子 勸学〕〔参考〕氷は水より出でて水よりも寒たし。出藍の誉。

秋高く馬肥ゆ

△秋高馬肥▽ 〔趣味秋が深まり空は高く澄んで、馬も元気に肥える。句

奴（蒙古民族）の侵入を警戒すべき兆候をいう。わが国では、運動行楽の好季節の意に用いる。〔解説〕中国では、秋になって飼料が豊富になると馬が勢いを得て、そのため匈奴はしばしば中国に侵入した。この季節は外敵に対して最も警戒すべき時であった。出典「匈奴秋に至りて馬肥え弓勁し。即ち塞（中国北方のとりで）に入る。」〔漢書 匈奴伝〕「雲淨くして妖星（不吉な星）落ち、秋高くして塞馬肥ゆ。」〔杜審言 贈蘇味道・詩〕〔参考〕天高く馬肥ゆ。天高肥馬。秋高肥馬。天高くして氣清し。〔宋玉 九辨五首〕

秋の扇

△秋扇▽ 〔趣味秋になって無用になったう

ちわ。寵愛を失った女性にたとえる。〕〔解説〕「扇」は、わが国のうちわにあたる。前漢の成帝の時、班婕妤（班は姓、婕妤は女官の地位を示す名）は趙飛燕のために帝の寵愛を失い、わが身を秋扇にたとえて詩を作った故事にもとづく。白絹で合わせ貼りの円いうちわ

を作れば、それは満月にも似て君の懷や袖に出入りしてそよ風を送るが、やがて秋になれば涼風が炎暑を吹き去り、うちわも無用となって箱の中に捨てられてしまうように、わたしも君の寵愛を失ってしまうことが気がかりであるとの意をうたったもの。出典「新に齊の執素（白絹）を裂けば、皎潔（白く清らか）にして霜雪の如し。裁ちて合歡の扇を為れば、団々として明月に似たり。君が懷袖に出入し、動揺して微風発す。常に恐る秋節の至りて、涼風炎熱を奪ひ、篋笥（箱）の中に弃捐せられ、恩情中道に絶えんことを。」〔班婕妤 怨歌行〕「妾が身（班婕妤をさす）は秋扇に似たり。」〔劉孝綽 班婕妤怨〕〔参考〕秋扇。班女が扇。夏扇冬扇（無用なものたとえ）。

惡衣惡食を恥ずる者は、

未だ与に譲するに足らず

△恥す惡衣惡食者、未だ与に譲するに足らず 足与譲也▽ 〔趣味學問・

質的虚栄心を捨てなければならぬ。〕〔解説〕「論語」にある孔子のことは。「惡衣惡食」の「惡」は粗末の意。「与に譲する」は話し相手とすること。道德・學問を目標に努力するのは、自分の衣服や食物の粗末なことを気にかけて恥ずかしがっているようでは話し相手にならないと

いうこと。【出典】「子曰わく、士、道に志して、而も悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議するに足らざるなり。」

【論語 里仁】

悪事千里を行く

△悪事行千里ニ▽ 意味悪い評判はたちまち世間に知れわたること

解説他人の悪事は好んでつげ口するものであるから、またたくうちに千里四方も広く伝わってしまうの意。

「好事門を出でず」と対句で、他人の良い行いはかえって人が言いふらさないから家のそとにも知られないというのに対する。【出典】「好事門を出でず、悪事千里を行く。」

【北夢瑣言】 参考 悪事千里を走る。悪事千里に伝わる。悪事千里。隠す事千里。ひ好事門を出でず。

悪の小なるを以て之を為すこと勿かれ

△勿ナ以ニ悪

小而为シテ之ノ▽

意味わずかなことでも悪事は行つてはならない。

解説たとえわずかばかりの悪だからといって、それを行つてはならない。小さな悪事が積み重なつて大きな悪事となるのだからの意。これと対応する句は、わずかばかりの善だからといって、それを行うのをやめてはならないの意である。ともにわずかなことだからという理由で行為にゆるみがあつてはならないとの戒めであ

る。【出典】「悪の小なるを以て之を為すこと勿かれ。善の小なるを以て為さざること勿かれ。」（三国蜀志 劉先主伝・注） 参考 君子は小善は為すに足らずと謂いて之を舍てず。小善積もりて大善となる。「淮南子」ひ小人は小善を以て益無しと為して為さず。「易経」

悪の易きや火の原を燎くが如し

△悪之易也如ニ火之燎于原一▽

意味悪事のきわめてはびこりやすく、ふせぐてだてのないこと。【解説】「易き」は「易る」とも読み、燃えひろがること。悪事は伝染しやすく、あたかも野火が次から次へと焼け広がってゆくようなもので、容易にたちむかえず、手のほどこしようなものとの意。【出典】「商書に曰わく、悪の易きや火の原を燎くが如し。鶴い、邇づくべからず。」（左伝 隠公六） 参考 燎原の火。燎原の勢。

握髮吐哺

意味どんな場合にも人を待たせずに面会する意で、すぐれた人材を待ち望むこと。

また、熱心に賢人を求めること。【解説】「握髮」は、髪を手で握り持つ、「吐哺」は、口中の食べ物を吐き出すこと。周公が、洗髪中に来訪者があれば、洗い髪を握り持ったままで出迎え、食事中に人がおとずれれば、口の中の食べ物を吐き出してすぐに面会した故事による。来訪

者の中にはどんなすぐれた人物がいるかも知れないので、その人の意見を聞きのがしてはならないと努めたこと。禹王にも同様のことがある。【出典】「周公、之を誡めて曰わく、……一沐に三たび髪を握り、一飯に三たび哺を吐く。猶お天下の士を失わんことを恐る。」【史記 魯周公世家】【参考】吐握。握沐。吐哺握髮。吐哺捉髮。↓一饋に十起す。

悪木盗泉

【意味】少しでも汚れたものには身を近づけてはならない。【解説】「悪木」は、わるい

樹木、「盗泉」は、ぬすみの泉で、いずれも人々からそう呼ばれている名。どんなに疲れていようと、悪木と呼ばれている木の陰ではわずかな休息もしてはならず、いかにのどがかわいていようと、盗泉と名づけられている泉の水はまちがっても飲んでほならないということで、廉潔を重んじる人物はわずかな悪にも接近しないことをいう。【出典】「悪木の陰には、暫くも思うべからず、盗泉の水は、悞りても飲む容き無し。」【周書 寇雋伝】【参考】悪木に蔭せず。渴しても盗泉の水を飲まず。【陸機・詩】

阿衡の佐

△阿衡之佐△【意味】良臣による補佐。補佐する良宰相。【解説】「阿」は、よりかかりたよる意、「衡」は、公平をたもつことで、国王がたよりと

して政治の公平をはかる意。「佐」は、たすけること。「阿衡」は、殷代におかれた官名で総理大臣に相当し、伊尹が任命された。伊尹は殷の湯王をたすけた名宰相で、ここから良宰相・賢臣の意に用いられるようになった。【出典】「魏、阿衡の佐を得と雖も、曷ぞ益せんや（『魏の国が、かりに良臣の補佐を得たとしても、なんの役に立とうか。』）【史記 魏世家】

足を翹げて待つ

△翹足而待△【意味】ほとんどなく事が実現すること。【解説】「翹」は、

つまだてる意。足をつまだてて待ち望んでいるうちにそうなること。短時間のうちに予想が事実となって出現することをいう。【出典】「大臣内に叛き、諸侯外に反せば、亡ぶること足を翹げて待つべきなり。」【史記 高祖紀】【参考】足を翹げて待つ。なお「翹足」「翹企」「翹望」などの熟語は、熱心に待ち望む意に用いる。

足を重ねて立ち、目を仄てて見る

△重足而立、仄目而視△

【意味】おすおすとして恐れて不安なさま。【解説】足と足を重ね合わせてたちどまり、伏し目になって横目でうかがい見る意。「仄」は「側」に同じ。一説に「目を仄てる」は、目にかどをたてる意とする。甚だしく不安でおじ恐れる

様子をいう。【出典】「天下をして足を重ねて立ち、目を从てて視しむ。」〔漢書 汲黯伝〕

足を削りて履に適し、頭を殺いで冠に便にす

△削足適履、殺頭便冠▽【意味】目さきのことにとら

われて根本を忘れること。【解説】足を削って靴の大きさに

合わせ、頭を削って冠の大きさに合わせるの意。本末を

とり違えて肉体を損傷するようなおろかな行いをいう。

【出典】「骨肉（＝肉親）は相愛するも、讒賊之を問つれば

（＝悪人が告げ口して間をさけば）、而ち父子も相危う。

夫れ養う所以にして養う所を害するは（＝養育する者が

養育される相手を傷つけるのは）、譬えは猶お足を削り

て履に適し、頭を殺いで冠に便にするがごとし。」〔淮南

子 説林訓〕

足を知らずして履を為す

△不知足而為履▽

【意味】同類のものは性質

も共通する。人の本性は似たりよったりであること。

【解説】わら靴を作る職人は、いちいち人の足の寸法を知ら

ずに靴を作るが、それが土を運ぶもつこにはならないと

いうことから、人の足は万人において大きさが一定して

おり、これと同様に人間の本性も万人においてへだたり

のないことをいう。【出典】「聖人も我と類を同じくする者なり。故に龍子曰わく、足を知らずして履を為るも、我其の責（＝もつこ）と為らざるを知ると。履の相似たるは、天下の足同じければなり。」〔孟子 告子上〕

足を帝の腹に加う

【意味】身分の低い者が天子の位を

ねらうこと。また、地位を越え

てわだかまりのない交際をむすぶこと。【解説】「腹に加う」

は、腹の上にのせかけること。後漢の嚴光（字は子陵）

は、光武帝ともと学友であった。光武帝の即位後は身を

隠していたが、ついに見つけ出されて光武帝に会い、い

つしよに眠った折、嚴光の足が光武帝の腹の上にのった

ため、翌日史官が「客星（遊星）が御座（天子の位）を

犯した」と奏上して、謀叛の前兆のあることを告げた。

しかし、光武帝は「わたしの旧友の嚴子陵がいっしよに

寝ただけのことだ」と笑ってそのことばを退けたという。

【出典】「相對すること累日、因りて共に偃臥するに、光足

を以て帝の腹の上に加う。明日太史奏す。客星、御座

を犯すこと甚だ急なり、と。帝笑いて曰わく、朕が故人

（＝昔なじみ）嚴子陵共に臥せるのみ、と。」〔後漢書

逸民伝〕【参考】客星帝座を犯す。

足^{あし}を万里^{ばんり}の流れ^{なが}に濯^あう△濯^{せんじん}足^{あし}万里^{ばんり}流^{なが}△

【意味】

俗世間を超越して潔白な

生活を送ること。【解説】世俗の名利から離れて高潔な志を

いだき、人里離れた土地で清らかな山水に囲まれて暮らすことをいう。万里もある長く清らかな川で足を洗って

世俗の塵をおとす意。【出典】「衣を千仞の岡に振るい、足

を万里の流れに濯う。」「左思 詠史・詩」【参考】「衣を千

仞の岡に振るう。

蘆^{あし}を啣^くむ雁^{かり}△啣^く蘆^{あし}雁^{かり}△【意味】本能的に身を護る知恵をそなえていること。【解説】「蘆を啣む」は、枯れあしを口にくわえること。雁が遠くに飛ぶときは、風に乗って身体の疲労をやわらげたり、枯れあしを口にくわえて捕鳥具のいぐるみを防ぐということから、自然に身にそなわっている防衛の手段のこと。なお一説には、枯れあしをくわえて飛ぶのは海上で羽を休めるためともいう。【出典】「夫れ雁は風に順^{したが}いて、以^もって氣力を愛^あしみ、蘆^{あし}を啣^くみて翔^そり、以^もって矰^そ弋^ぎ（弋糸をつけた矢で、鳥を捕らえる道具）に備^{そな}う。」「淮南子 脩務訓」【参考】「雁は草を銜^くみて網を捍^あぐ。
朝^{あした}に道^{みち}を聞^きけば夕^{ゆうべ}に死^しすとも可^かなり△朝聞^{あしたき}道^{みち}夕死^{ゆうべし}可^か矣^や△【意味】人としての道^{みち}を聞き知^しることは人間にとつての重大事である。【解説】人としていかにあるべきかという真理は、ことばとして容易に聞き知^しることのできるものではない。かりにもその日の朝にこの真理を聞くことができ

れば、夕方には死んでも心残りはないほどであるの意。『論語』にある孔子のことばで、道徳へのやみがたい追

求を述べ、修養の道の重要性を強調したもの。一説には

「道を聞^きけば」を、広く天下に道徳が行われるようになったことを耳にすればと解釈する。【出典】「子曰^いわく、朝^{あした}に道^{みち}を聞^きけば、夕^{ゆうべ}に死^しすとも可^かなり。」「論語 里仁」朝^{あした}に夕^{ゆうべ}を謀^{はか}らず△朝不^{あした}謀^{はか}夕^{ゆうべ}△【意味】①先行きの

ことは考えない。②先行きは、どうなるかわからない。【解説】①朝は朝だけの事を考えて生活

しているの、夕方のことは思慮しない。つまり、さし

せまった状況にあるので、長い将来のことを考える余裕

はないということ。②一日のうちにどのような変化が起

こるかわからず、朝のうちに夕方のことは見当がつかない

ということ。【出典】①「吾が儕^{わがとら}、儉食^{けんしよく}（「かりそめに食をつなぐ）して朝に夕を謀^{はか}らず、何ぞ其^{なんそ}れ長^{ちやう}をせん（「

どうして遠い先行きのことを考慮できようか。」「左伝

昭公元」②「人命は危^き浅^{せん}（「あやうくはかない）」にし

て朝に夕を慮られず。」「(李密 陳情表) 〔参考〕朝に夕を慮られず。朝に夕を保せず。↓朝夕に及ばず。

朝には富児の門を扣き、暮には肥馬の塵に随う

△朝扣富児門、暮随肥馬塵▽ 〔意味〕富貴な人にこびへつらつて、みじめな生活すること。 〔解説〕朝方には金持ちの家の門を叩いてご機嫌うかがいに出むき、その日の夕方には肥えたりっぱな馬に乗って行く権力者のお供をして土ぼこりをかぶりながら歩くとの意。財産家や有力者にお追従しながら寄食する生活をいう。 〔出典〕朝には富児の門を扣き、暮には肥馬の塵に随う。 残盃と冷炙と(「飲み残しの酒や冷えたあぶり肉を与えられて」、

到る処潜かに悲辛す(「いたるところで恥をしのび人知れず悲しみ苦しんだ。」「(杜甫 贈韋左丞・詩) 〔参考〕後塵を拝す。

朝、夕に及ばず

△朝不及夕▽ 〔意味〕事が切迫していて待ちきれないこと。 〔解説〕夕方にはどうなるかわからず、事がさしせまった状態になつていて、朝方に夕方まで待つてはいられないの意。

〔出典〕「公曰わく、吾其の由つて来たる所を知る。姑少く我を待て、と。対えて曰わく、朝夕に及ばず、又何を以つ

て君を待たん。」「(左伝 僖公七年) 〔参考〕朝に夕を謀らず。足なえ起つことを忘れず 〔意味〕欠陥のある者ほどそれを満たそうとする

欲望が強いこと。 〔解説〕足がなえて立てない不具者は、常に起ちあがつて歩くことを熱望し、目くらははつきり物が見えるようになることを片時も忘れない。つまり、自分に欠陥があれば、人一倍それを満たしたい欲望があることをいう。 〔出典〕「僕(ぼく)の帰る(「帰郷」)を思うこと、瘡(かさ)人の起つことを忘れず、盲者(もろや)の視るを忘れざるが如し。」「(前漢書 韓信伝) 〔参考〕瘡人、起つことを忘れず。

汗出でて背を沾す

△汗出沾背▽ 〔意味〕甚だしく恥じること。 〔解説〕背中いっぱい

いにひや汗をかくことで、漢の孝文帝が一年間の収支決算を大臣の周勃(しゅうはつ)にたずねたところ、周勃はこれを知らずに恥じたという故事による。とりかえしのつかない失敗をしたり、心にやましいところがあつてそれを責められる場合をいう。 〔出典〕「汗出でて背を沾し、愧じて応(こた)へる能(あた)わず。」「(史記 陳丞相世家) 〔参考〕汗流れて背に洩(あまね)る。冷汗三斗。

汗を反す

△反汗▽ 〔意味〕一度出した命令をとり消すこと。 〔解説〕「反す」は、体内にひきも

どす意。汗は二度と体内にもどらないが、上から出した命令もこれと同じで取り消しはできない。りっぱな命令を出しておきながら、あとでこれを取り消すのはあたかも汗を体内にひきもどすようなものであるということ。
 出典「号令は汗の如し。汗は出でて反らざるものなり。今善令を出だし、未だ時を踰ゆる能わずして反すは、これ汗を反すなり。」〔漢書 劉向伝〕 参考 〓 反汗。

遊ぶに必ず方あり

△遊必有方▽ 意味 父母の生存中は、所定めぬ勝手な旅行は

しない。解説「遊ぶ」は、旅すること。「方」は、方角

『論語』にある孔子のことばで、父母が在世中は遠い土地への旅行はしない。旅行するにも一定の方角をきめておき、勝手な所へ行かないという教え。父母は子の不在中はことに心配するものであるから、あまり心配をかけないようにせよとの戒めである。出典「子曰く、父母在せば、遠く遊ぶ。遊ぶに必ず方あり。」〔論語 里仁〕 参考 〓 親老いたるときは、出するに方を易えず。〔礼記

玉藻〕

寇に兵を藉す

△藉寇兵▽ 意味 敵に利を与えて味方の害を甚だしくすること。また、

悪人に悪事を行うのに都合よい口実を与えること。解説

「寇」は、外敵。「兵」は、武器。敵に武器を供給するような誤った策をとって、味方をいっそう不利な立場に落とし入れることをいう。盗に糧を齎す（〓 盗賊に食糧をどける）と対句。出典「今乃ち黔首（〓 人民）を乗てて以って敵国を資け、賓客を卻けて以て諸侯を業け天下の士をして退きて敢て西に向わず、足を裏みて秦に入らざらしむるは、此れ所謂寇に兵を藉し盗に糧を齎す者なり。」〔戦国策 秦策〕 参考 〓 敵に糧。盗に糧。盗人の提灯持ち。

中らずと雖も遠からず

△雖レ不レ中不レ遠矣▽ 意味 推測どおりであること。

と。的中していないにせよ、ひどいまちがいでないこと。解説まごころをもって求めるならば、完全に適合しないまでも、ほぼその目的を達成するということで、我が子に対する慈愛の念を国家の政治に及ぼせば、ほとんどその理想とする目標に到達できることを述べたもの。現今では、予想が九分どおり適中する意、ひどい見当違いでないなどの意に用いる。出典「康誥（〓 書経の編名）に曰わく、赤子（〓 幼な子）を保んずるが如くす、と。心誠に之を求むれば、中らずと雖も遠からず。未だ子を養うことを学びて后に嫁する者有らざるなり。」〔大学〕